

# 特別記事

## 世界のドラフトホース (7) ハンガリー、海外総集編および 日本の農用馬 柏村文郎



柏村文郎（かしまむら ふみろう）  
1950年生まれ。1977年に帯広畜産大学畜産学研究所修士課程を修了。1977年から4年間全国酪農業協同組合連合会に勤務。1981年に帯広畜産大学助手採用、現在同大学食料生産科学講座（家畜生産科学分野）教授。学生時代4年間馬術部を経験し、現在は馬術部部长。研究教育は乳牛の管理と馬学。研究室ではアラブ、北海道和種馬など10頭の馬を学生と共に管理している。

### 1. ハンガリーの馬

ハンガリー（Hungary）の国名は騎馬遊牧民のフン族（Huns）に由来する。人口約1千万人のうち97%はマジャール人であり、その祖先は6～8世紀にウラル山脈付近から移動し、9世紀に現在のハンガリー盆地に定住した。

日本では、ハンガリー馬についてあまり知られていないが、実は明治16年に23頭のハンガリー馬が輸入されている。さらに明治29年に公布された馬匹改良30ヵ年計画では、1,500頭の外国産馬（洋種）で日本在来馬（和種）150万頭を改良しようとしたのだが、その外国産馬には多くのハンガリー馬が含まれていた（表1）。この表で、ギドラン、ノーススター、フリオゾー、

表1 馬匹改良30ヵ年計画で輸入された種馬の品種  
(1906～1923：馬政第一次計画・前期)

品種	輸入頭数		
	雄	雌	計
アラブ	22	6	28
サラブレッド	96	72	168
アングロアラブ	4	0	4
ギドラン	24	23	47
トロッター	1	0	1
ノーニウス	7	19	26
ノーススター	7	8	15
フリオゾー	9	9	18
ハクニー	215	0	215
アングロノルマン	324	189	513
クリーブランドベイ	3	0	3
ブルトン	9	0	9
ペルシュロン	28	29	57
ブラバンソン	4	2	6
合計	753	357	1110

ノーニウスがハンガリー原産の馬である。当時の日本政府（馬政局）が、なぜハンガリー馬に着目したのか。私は、オーストリア・ハンガリー二重帝国を統治したハプスブルグ家の大牧場がハンガリーにあったことが大きな理由ではなかったかと想像している。1785年にハプスブルグ家出身の皇帝ヨセフ2世によって設立されたハンガリーのメツェヘギース牧場には、軍馬4,000頭が繋養されていたという。その牧場では、種雄馬ごとの系統繁殖を基本とし、時々サラブレッドの血液を導入することによって改良が進められていた。その結果、1869年にはギドラン、メツェヘギース半血、大型ノーニウス、小型ノーニウスの4系統が作出された。ギドランはアラブ純血種のギドラン号の子であるギドラン・セニオール号（栗毛）が根幹馬となった。ノーニウスはフランスから持ち込んだアングロノルマンのノーニウス号（鹿毛）が基礎となった。メツェヘギース半血は、サラブレッドのフリオゾー号およびノーススター号を基礎馬として作られた。現在はこの二系統は混合され、フリオゾー・ノーススターともよばれている。バボルナ牧場（1789年創設）は、シャギアアラブ（写真1）を作出したことで有名で、この品種の名前は、根幹馬であるアラブ純血種のシャギア号に由来している。

### 2. ハンガリー農用馬

ハンガリーの地形は、西がやや高く、東に向かって次第に低まる盆地状をしており、中央には南北を貫くようにドナウ川が流れている。ドナウ川の東側は川の水より数m高い程度の平坦な大平原（プスタ）が広がっている。その地方は、降雨量の少ない大陸的気候で、乗用馬生産地として有名である。一方、ドナウ川

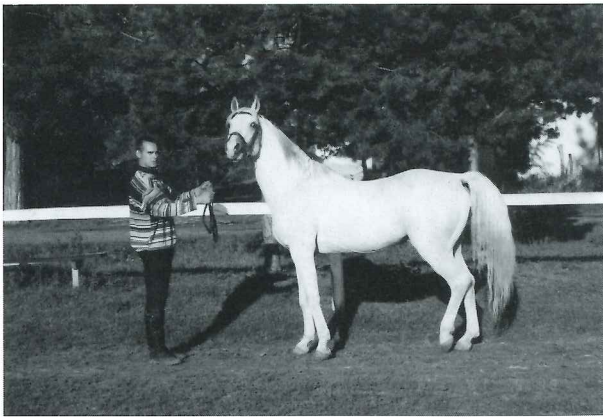


写真1 ハンガリーの乗馬として有名なシャギアアラブ

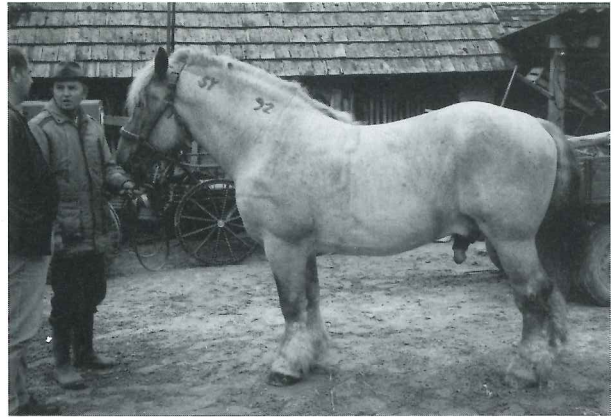


写真2 ハンガリー農用馬  
雄10歳、体高159 cm、体長183 cm、胸囲207 cm、管囲27.5 cm

の西側はトランス・ダニュービアと呼ばれ、レス（黄土）をかぶった広大な台地が中部ヨーロッパ最大のバラトン湖まで続いている。そこは適度な降雨のある良好な農耕地帯である。

騎馬遊牧民族であるマジャール人にとって、農用馬は好みに合わなかったためか、古くはあまり飼われていなかった。しかし農耕に適したドナウ川の西側に定住して、オーストリアのノリカーを交配したムラコジ（Murakozí）とよばれる馬を農耕に利用するようになった。なお、ムラコジという名は、かつてハンガリー領であったスロベニアのムラ（Mura）という地名に由来している。

ハンガリー農用馬協会での話によると、ハンガリーには7～8万頭の馬が飼養されており、その25～30%が農用馬であるという（写真2）。1997年の農用馬の繁殖雌馬は17,565頭で、産駒数は9,142頭であり、繁殖雌馬のうち農用馬との交配が約4,000頭とのことであった。その年に繁殖に供された農用馬の種雄馬は230頭であった。ハンガリー農用馬は多くが雑種で、純粋種の種馬としては、アルデンネ3頭、ペルシュロン1頭、ノリカー2頭が用いられていた。種雄馬は全国190箇所配置され、うち12箇所では人工授精（AI）を行っており、AIの割合は全体の5～6%とのことであった。ハンガリーの農家には、社会主義体制時代の集団農場であるコルホーズが株式会社になった大規模農場と以前からある零細な家族経営の農家がある。零細な農家では、現在も農耕や荷物運搬用として農用馬が飼われている（写真3）。しかし、EU加盟を目指した農業の近代化が進められており（2004年にEU加盟）、



写真3 ハンガリーの農村では今も、馬車が使われている。

農用馬の頭数は減少を続けている。

### 3. 世界のドラフトホース

私はこれまで、海外13カ国、24品種のドラフトホース（農用馬）、について調査し、報告してきた。これらの国のドラフトホースについて私見も交えながら次のように要約を試みた。

#### 【アメリカ、カナダ】

農用馬は趣味娯楽の対象で、ショーが中心である。ショータイプの馬は、体高が高く（180 cm以上）、肢が長く短背で、乗馬体型に近い。重量物を曳くよりもアクション（高揚した歩様）を重視している。ただし、従来の背が低く胴の長いファームタイプは、アーミッシュが今も農耕用として利用している。アメリカとカナダを合わせた農用馬の飼養頭数は30万頭近くに及ぶのではないかと推測する。（調査馬：アメリカペルシュロン、アメリカベルジアン、カナダペルシュロン、



カナダベルジアン)

【フランス、ベルギー】

フランスでは農用馬は地方の文化遺産として、全国23箇所の国立種馬所が中心となり、保存と活用に力を入れている。ブルトンは肉用馬として人気があり、重量化およびコンパクト化の傾向がある。なお、ヨーロッパで馬肉の消費が多い国は、フランス、ベルギー、イタリアである。近年、ショータイプのアメリカペルシュロンがフランスに輸入され、物議をかもしている。ベルギー政府は、近年、ベルギー輓馬（ベルジアン）とアルデンネの保護に乗り出した。ベルギー馬はヨーロッパのドラフトホースの中でも歴史が古く、各地のドラフトホースの改良に使われてきた。ベルギー人は馬肉を食するが、自国での飼養頭数が少なく、馬肉はイタリアから輸入している。（調査馬：ペルシュロン、ブルトン、ベルギー輓馬、ベルギーアルデンネ）

【ドイツ、デンマーク】

ドイツの冷血種の多くは希少家畜であり、州政府の保護を受けている。また、EUには希少家畜に対する補助金制度があり、ドイツでも若干増加傾向にある。活用としては、ドイツの森で木の搬出に使われている。また、伝統的な能力検定制度が今も生きており、性能を失わないよう配慮されている。デンマークの冷血種も希少家畜である。（調査馬：ラインドイツ冷血種、アルトメルク冷血種、シュレスビヒ冷血種、デンマークベルジアン、ユトランド）

【ポーランド、ハンガリー】

東欧圏では今も一部農作業や荷物運搬用として馬が利用されている。しかし、EU加盟後、農業の近代化とともに急激にその数は減少している。また、今後の活用としては、農村ツーリズム、エコロジー農業、馬車のレジャー、乗馬セラピー、景観資源の他、肉用馬としてイタリアへの輸出もある。ポーランドはドイツの影響を強く受け、能力検定は現在も続けられている。ハンガリーには旧オーストリア・ハンガリー二重帝国の伝統的な大牧場があり、乗用馬生産が中心であるが、ドナウ川西岸には農用馬も飼養されている。（調査馬：ポーランド冷血種、ハンガリー農用馬）

【スウェーデン】

スウェーデンは環境に優しい農業や林業をめざしており、今も馬を活用している人たちがいる。ゆったりとした国民性もあり、乗馬は人気スポーツである。ま

た、家畜福祉思想が広く国民に支持されており、馬の飼養施設の基準も整備されている。（調査馬：スウェーデンアルデンネ、北スウェーデン）

【イギリス、アイルランド】

馬は高貴な動物として貴族や領主が保護する伝統がある。一方、個人主義の気風が強く、ドラフトホースやスポーツホースには全国的な生産者組織がないため、サラブレッド以外の馬産業の基盤は弱いようである。サフォークは伝統的な作業用馬として魅力的な馬であるが、今は希少家畜である。一方、シャイアーとクライズデールはショータイプに移行しつつある。イギリス人（アングロサクソン＝英語を母国語とする）は馬を食用とすることに批判的であることを認識しておくべきである。イギリスは家畜福祉思想の発祥国であり、犬と馬への愛着には特別なものがある。アイルランドのアイリッシュ輓馬はアイリッシュスポーツホースを改良するための基礎馬として重要な地位を占めている。また、アイルランドは、国が馬産を積極的に支援している点で注目に値する。（調査馬：シャイアー、サフォーク、クライズデール、イギリスアルデンネ、アイリッシュ輓馬）

【イタリア、オーストリア】

イタリア重輓馬は肉用馬として積極的な育種改良が進行中である。肉用馬生産において、6ヵ月齢検定と育種価（アニマルモデル）による科学的な育種改良方法は注目すべきだ。オーストリアのノリカーはローマ時代からの古い品種であり、今は趣味の動物として飼われている。（調査馬：イタリア重輓馬、ノリカー）

#### 4. 日本の農用馬（写真4）

これまで世界のドラフトホース（農用馬）について述べてきた。次に日本の農用馬の現状と今後の展望について考えてみたい。

近年、欧米の先進諸国において共通して起こった現象は、モータリゼーションの普及にともなって、ドラフトホースが激減したことである。農村におけるトラクターの増加とドラフトホースの減少は実に対照的に変化した。その現象は、戦後の日本においても例外ではない。ところが先進諸国を回って気が付いたのは、最近の動向が日本と少し違う点であった。先進国でのドラフトホースの減少は10年ほど前に底を打っていた。一方、日本の農用馬の減少は現在も続いており、



写真4 十勝の共進会での一コマ。

特に最近では「ばんえい競馬」の廃止が噂されてからさらに減少傾向は強まった感がある（表2）。欧米のドラフトホースの減少がなぜ止まったかという点、馬を趣味で飼う人々が増えてきたからである。農家または農村に住む人々の趣味である。また一部ではあるが、環境に優しい農業や林業を目指す人々が再び馬で仕事をするようになった国もある。

日本では趣味で馬を飼うのは容易なことではない。自分で厩舎を持つには土地の値段が高すぎるし、放牧する土地もない。馬糞を処理する畑もないし、臭いやハエの発生も周囲の住民に嫌われる。さらに、忙しくて馬の世話をする時間もない。これらが日本で馬を飼う人が少ない主な理由であろう。しかし、これらの問題の少ない田舎でも趣味で馬を飼う人はめったにみないところを見ると、日本では、馬は働く動物であり、ペットとして飼う動物ではないという思いが根強いのではないだろうか。

もう一つ日本と欧米との違いはスタッドブック（馬

の血統登録書）に対する考え方である。馬の品種とは、英国流の考え方では、在来馬のような特別な馬は例外として、スタッドブックで血統がしっかり管理されているという条件がある。スタッドブックに繁殖登録されるのは、登録協会認定した検定員が審査し、その審査に合格した馬だけである。特に雄馬に課せられる体型審査と能力検定は厳密で、誕生した雄馬のうち繁殖登録できるのは1割にも満たないのが普通である。ところが、日本では繁殖登録のとき、体型審査や能力検定は行なわれていない。サラブレッド競馬やばんえい競馬では、競馬という仕組みが一種の能力検定の機能を果たす。競走成績の優秀な馬だけが種馬になるのだ。一方、競走馬以外の一般馬では、繁殖登録を厳格に行なわなければ品種として品質が保証されないことになる。スタッドブックの考え方は、血統証明書の発行のみではなく、品種改良の思想が無くてはならないのである。最近、日本スポーツホースという品種ができたが、残念ながら品種改良の思想は取り入れられていないようなのが気にかかる。

馬肉の消費拡大を声高に唱えるのは、馬好きにとって複雑な気持ちになる。しかし、日本では農用馬の存続を考えると避けては通れないというより、むしろ最重要の問題である。例えば、平成16年の農用馬の生産頭数は3,163頭であったが、平成18年のばんえい競馬の能力検査に合格した2歳馬は150頭しかいない。3歳で能力検査を受ける馬もわずかにいるとは思いますが、それでも農用馬の95%は肉用として販売されているのだ。北海道には馬肉を食べる習慣がない。そのため北海道で生産された農用馬のほとんどが消費地である熊本に送られ、そこで肥育される。馬肉消費の日本の特殊性は、馬刺しとして食べることである。そのため、

表2 馬の総飼養頭数の推移（農林水産省馬関係資料より）

（単位：頭）

年次	軽種馬	農用馬	乗用馬	小格馬	在来馬	肥育馬	合計
平成4年	73,032	27,066	9,192 (9,192)	—	3,203	6,780	119,273
6	72,484	28,397	10,108 (10,108)	—	3,466	7,955	122,410
8	68,489	25,321	11,234 (11,234)	—	3,240	9,910	118,194
10	64,120	22,412	11,646 (11,646)	—	2,892	10,260	111,330
12	60,795	19,537	11,739 (11,739)	—	2,510	9,396	103,977
14	58,413	16,963	14,225 (13,457)	1,627	2,396	12,390	106,014
16	53,022	13,621	13,715 (12,971)	1,555	2,272	12,399	96,584

（注）乗用馬の（ ）内は、乗馬施設で供用されている馬で内数



海外から輸入する場合、馬肉としてではなく生体で輸入しなければ価値はない。平成16年度の食用を目的とした馬の輸入頭数は5,148頭であった。国内の農用馬生産頭数よりも多い頭数が海外（アメリカ、カナダ）から輸入され、食用に供されているのが実情である。アメリカでは食用を目的とした馬の屠殺を禁止する法案が下院を通過したと聞く。アングロサクソン中心の文化であるアメリカでは、馬を食べることに反対する勢力が多い。イギリスでは食用を目的とした馬の生体輸出が禁じられているが、今後はアメリカでも同じようなことが起こるのではないかと考えられる。

日本において趣味で農用馬を飼うことが望めない現状では、農用馬を残すには今後も食用としての道を模索するしかないだろう。さらに将来的に想定される家畜福祉に関する海外からの圧力に対して、馬肉を食べる正当性を主張するには、長距離輸送や肥育牧場での馬のストレス軽減、さらには馬に苦痛を与えない屠殺方法などの研究が必要になるだろう。さもないと馬肉消費の問題は、捕鯨問題と同じように日本の立場を危うくする事態に発展することも考えられる。

## 5. ばんえい競走馬（写真5）

ばんえい競馬で使われている農用馬は、ほとんどが半血種とよばれる雑種である（表3）。これらの雑種は、これまでは半血種（輓系）とよばれていたが、日本馬事協会の種馬登録規定の改定により平成15年3月から「日本輓系種」とよばれることになった。これまで行なわれてきたばんえい競走馬の改良は、雑種強勢（ヘテロシス）を利用したものである。雑種強勢とは、畜産学で習うことだが、異なる純粋種どうしを交配することによって元の純粋種より体格や強健性さらに肉量や肉質などの優れた子畜を生産する技術である。ばんえい競走馬の生産者は、純粋種としてベルシュロンおよびブルトンを原産国のフランスから、またベルジアンをアメリカやカナダから輸入し、交配してきた。しかし、近年、生産者が望むような大型の農用馬がフランスでは減少している。また、アメリカのように農用馬が趣味で飼われるようになると、重量物を曳くより、動きのよい乗馬体型のプロポーションが好まれるようになる。このような世界の趨勢を考えると、重いそりを曳くばんえい競馬に適した農用馬資源を海外から輸入することは難しくなると思われる。



写真5 平成19年度から帯広市のみで開催されることになったばんえい競馬「ばんえい十勝」

表3 近年20年間のばんえい競走馬の品種（1972～94）

	品種	頭数	%
純粋種	ベルシュロン	214	4.5
	ブルトン	8	0.2
	ベルジアン	13	0.3
系種	ベルシュロン系	478	10.1
	ブルトン系	79	1.7
	ベルジアン系	16	0.3
半血種	中半血	116	2.5
	重半血	194	4.1
	重系種	141	3.0
	半血種（輓系）	3471	73.4
合計		4730	100.0

平成15年から半血種（輓系）は日本輓系種と称する。

これまでの調査において、各国のドラフトホースの体格を測定してきた。世界のドラフトホースの成雌馬の体格の比較を図1に示した。さらに雌馬と雄馬の測定値を表4に示した。これらの値は実際にその国に出かけて調査した貴重なデータである。この図から明らかかなことは、日本輓系種は世界で最も体長が長く、胸囲が大きい馬ということである。また、馬の胸囲は体重と最も相関が高いことが知られているので、日本輓系種は世界で最も体重の重い馬ともいえるだろう。このような特殊な馬がなぜ日本で出来上がったのであろうか。

実は、サラブレッドという品種と日本輓系種の成り立ちは似ているように私は感じている。サラブレッドとは純血種という意味だが、その起源はイギリスにいた在来馬にアラブの雄馬を交配してできた品種であ

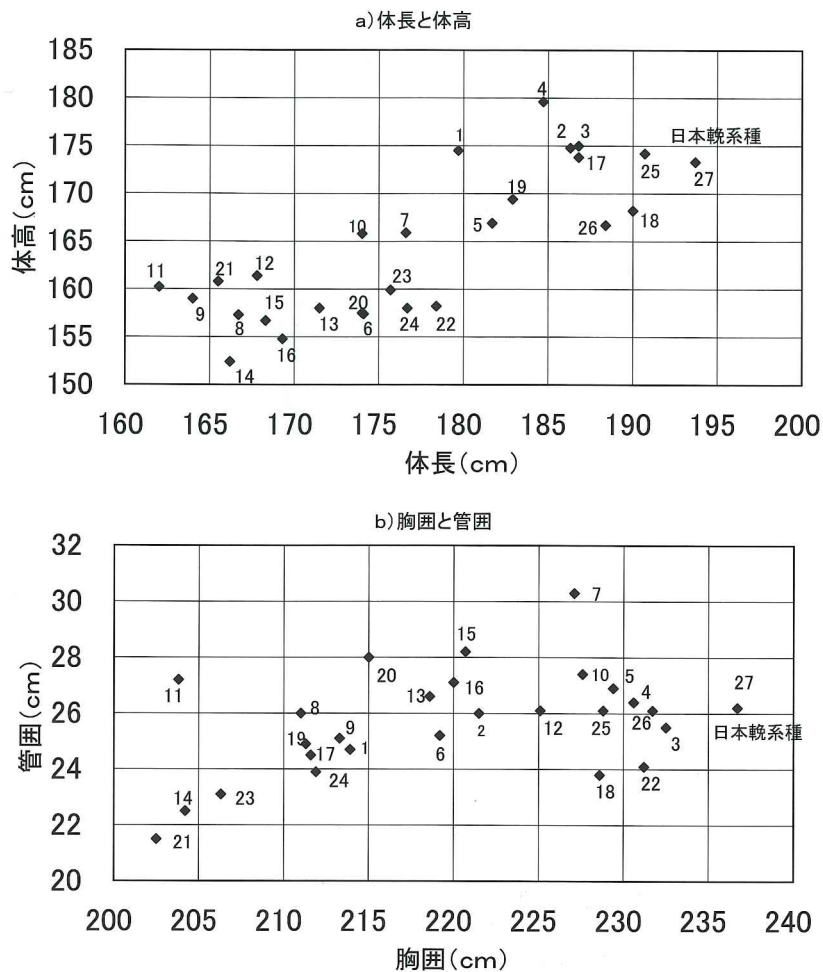


図1 世界のドラフトホースの体格比較 (成雌馬)

- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 1) アメリカベルシュロン   | 15) デンマークベルジアン  |
| 2) アメリカベルジアン    | 16) デンマークユトランド  |
| 3) カナダベルシュロン    | 17) イギリスシャイアー   |
| 4) カナダベルジアン     | 18) イギリスサフォーク   |
| 5) フランスベルシュロン   | 19) イギリスクライズデール |
| 6) フランスブルトン     | 20) イギリスアルデンネ   |
| 7) ベルギー純種       | 21) アイリッシュドラフト  |
| 8) ベルギーアルデンネ    | 22) イタリア重純種     |
| 9) ラインドイツ冷血種    | 23) オーストリアノリカー  |
| 10) アルトメルク冷血種   | 24) ハンガリー農用馬    |
| 11) シュレスヴィッチ冷血種 | 25) 日本ベルシュロン    |
| 12) ポーランド冷血種    | 26) 日本ブルトン      |
| 13) スウェーデンアルデンネ | 27) 日本純系種       |
| 14) 北スウェーデン     |                 |

る。純血アラブ馬よりはるかに大きなサラブレッドの体格や見事に発達した筋肉は雑種強勢によって作られたと思われる。すなわち、初めは交雑種でも血統をきちんと管理して、一定の性能や特徴が固定するまで方針を変えずに一定期間繁殖を繰り返せば、それは一つの品種となるのである。実は、競馬は、馬を改良するのに最適な能力検定システムということもできる。その証拠に日本では、優秀な軍馬を生産するために競馬

が利用されてきた。競馬の世界では、優秀な成績を残した馬だけが繁殖に使われる。そこで、その血統を正確に記録に残しておくことによって、ひとりでの改良が進むのだ。私は、日本のばんえい競馬にもそのようなことが起こっていないか調べてみたことがある(1995年)。

すると案の定、ばんえい競走馬の父親は、90%以上が過去にばんえい競走馬として活躍した有名な雄馬だ



表4 世界のドラフトホースの体格測定値の平均（単位：cm）

	成雌馬（3歳以上）					成雄馬（3歳以上）				
	頭数	体高	体長	胸囲	管囲	頭数	体高	体長	胸囲	管囲
1 アメリカペルシュロン	17	174.5	179.7	213.9	24.7	11	178.6	181.3	212.1	26.4
2 アメリカベルジアン	11	174.8	186.3	221.5	26.0	6	181.0	185.0	221.2	27.6
3 カナダペルシュロン	6	175.0	186.8	232.5	25.5	8	175.0	186.8	232.5	25.5
4 カナダベルジアン	9	179.6	184.7	230.6	26.4	2	179.5	180.0	220.5	27.5
5 フランスペルシュロン	19	166.9	181.7	229.4	26.9	—	—	—	—	—
6 フランスブルトン	9	157.4	174.1	219.2	25.2	10	159.7	169.0	223.7	28.5
7 ベルギー輓馬	7	165.9	176.6	227.1	30.3	3	170.3	177.3	230.3	34.3
8 ベルギーアルデンネ	3	157.3	166.7	211.0	26.0	1	164.0	173.0	223.0	32.0
9 ラインドイツ冷血種	3	159.0	164.0	213.3	25.1	10	162.3	165.2	212.3	28.9
10 アルトメルク冷血種	5	165.8	174.0	227.6	27.4	5	163.4	164.6	209.0	29.1
11 シュレスヴィッヒ冷血種	6	160.2	162.0	203.8	27.2	6	160.2	162.0	203.8	27.2
12 ポーランド冷血種	8	161.4	167.8	225.1	26.1	7	163.3	165.7	220.6	27.3
13 スウェーデンアルデンネ	17	158.0	171.5	218.6	26.6	11	161.1	170.4	213.5	29.9
14 北スウェーデン	9	152.4	166.2	204.2	22.5	4	153.5	162.3	196.3	26.1
15 デンマークベルジアン	3	156.7	168.3	220.7	28.2	1	169.0	180.0	229.0	35.0
16 デンマークユトランド	4	154.8	169.3	220.0	27.1	1	155.0	170.0	205.0	30.0
17 イギリスシャイアー	5	173.8	186.8	211.6	24.5	1	183.0	188.0	216.0	28.0
18 イギリスサフォーク	5	168.2	190.0	228.6	23.8	1	196.0	197.0	234.0	25.6
19 イギリスクライズデール	7	169.4	182.9	211.3	24.9	2	183.5	187.0	220.0	26.3
20 イギリスアルデンネ	2	157.5	174.0	215.0	28.0	2	159.0	177.0	205.0	27.5
21 アイリッシュドラフト	2	160.8	165.5	202.5	21.5	2	174.0	171.5	207.5	22.8
22 イタリア重輓馬	5	158.2	178.4	231.2	24.1	3	160.3	171.7	226.7	26.3
23 オーストリアノリカー	8	159.9	175.7	206.3	23.1	2	165.8	173.5	212.0	25.0
24 ハンガリー農用馬	19	158.0	176.7	211.9	23.9	11	160.2	172.7	208.5	26.0
25 日本ペルシュロン（2007）	54	174.2	190.7	228.8	26.1	3	173.3	186.7	224.7	30.2
26 日本ブルトン（2007）	36	166.7	188.4	231.7	26.1	3	165.7	183.7	220.0	28.5
27 日本輓系種（1992）	75	173.3	193.7	236.7	26.2	329	172.6	192.7	234.4	28.1

ったのである。これはサラブレッドの成り立ちに似ているのではないか。世界で唯一、ばんえい競馬という重量物（そり）を曳く競馬そのものが、日本輓系種を作りあげたといえるのである。

日本人の欠点の一つに、身の回りにあるものの価値に気が付かないことがあるように思う。世界のドラフトホースはそれぞれの土地に古くから根付いていた馬たちである。そして、その価値に気付いた人たちによ

って保存や活用が検討され、現在は少しずつ増加傾向に転じた。日本には日本在来馬という日本に古くから根付いてきた馬たちがいる。さらに、日本輓系種も戦後日本で作りだされた新しい品種なのである。このことにどれだけの人が気付いているだろう。身の回りにあるものの価値に気が付くこと、そして馬という動物の魅力に気が付くことが、これからの日本の馬を守る上で最も大切なことではないかと思うのである。